
魔女と僕と魔女

太陽サン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女と僕と魔女

【Nコード】

N4265BA

【作者名】

太陽サン

【あらすじ】

東京の真ん中、大都会にある塔で少年が魔女を目指す話です。

魔女への一步

東京、大都会の上空で僕は落ちた。
飛行船から都会のビル群へ。誰かに落とされた気もするが忘れた。
そんなことより僕にとって、人生を決める大切なことがおきた。

『ガシっ』

上空で落ちる、僕の手を誰かがとった。
それは、大きな白い翼を生やした人。
夕焼けに映るその白い美しい姿はまるで。

「天使……」

僕はそうつぶやいた。

「ぶーぶーはずれ！あたしは魔女だよ。」

彼女は陽気に、笑いながらそう言った。

僕はあのとき、あの瞬間決めたんだ。

魔女になるって。

彼女のような魔女に。

10年後

2017年東京

大都会東京の、ど真ん中に大きな塔があった。

それは、全長一万メートルの窓もないの飾りっ気もない殺風景な塔であった。

50年前まで、大東京タワーと呼ばれていたその場所だ。

その高い高い塔の足元に、一人の少年は立っていた。

塔を見上げるようにして、少年は塔を見て感動しているようだった。

「俺はここで・・・魔女になってみせる。」
そう静かに力強く、少年はつぶやいた。

50年前までこの一万メートルの窓もない飾りっ気もない殺風景な塔の、巨大な塔の扉が開かれた。

それは歴史上初めてのことである。

いや、人間の歴史上初めてのことである。

人間が存在する前の歴史には、この塔の扉は開いていたのかもしれない。

ようは、この塔は人間が存在する前からあったモノなのである。

それは、歴史上のあらゆる文献と。それを研究した歴史家によって証明されている。

『死の塔』

『まやかしの塔』

『神の塔』

『大東京タワー』

さまざまな時代で、さまざまな呼ばれ方してきた。そしていまの名称は、魔女学校。

魔女を育成するための、専門機関である。

この塔が、魔女学校と呼ばれるようになった経緯は、この塔の扉が初めて開いた50年前にさかのぼる。

それまで、この塔は不可侵にして絶対硬度を誇り、扉を開けることも塔を破壊することもできなかった。

そして、東京のド真ん中に。絶対的な塔として君臨していた。

だがある日、その塔の扉が開いたのだ。音もなく予兆もなくただ平然と、全長300メートルの塔の扉がひとりで。

戦後日本は、疲弊していた。

だがその話題は日本中。いや世界中を駆け巡り、観光の目玉として連日数百万単位の観光客が、塔のまわりに押し寄せていた。

だが、誰も扉の奥に誰も入らなかった、いや入れなかったのだ。

扉がまた閉まったのではない。扉が開いているのに入れなかったのだ。

まるで扉が開いた場所に、もう一枚の見えない分厚い扉が存在するかのように。

その見えない扉も不可侵にして破壊することもできなかった。

見えないのだから、当然のことだが。

そして、人々は、塔への侵入あきらめ。興味も徐々に薄れていった。そして、それから半年がたち。

この塔の扉が、開いているのがめずらしくもなく、あたりまえで見なれた光景になった頃。扉にある言葉が映しだされた。

それは、以前の開かずの扉ではなく、いま存在しているが、存在するはずのない、見えない扉のほうにである。

その文字は、宙に浮くように、白く発光して映しだされていた。

『この扉の先に入れる者は、魔力をもつ者だけである。』

この先に進めた者には、英知を与える。魔法という名の禁断の英知を。』

それ以来ここは、魔女学校と呼ばれた。

そして時は流れ。2017年東京。

現在、魔女学校は、通称魔女学と呼ばれ。この世界にもっとも重要な場所として存在していた。そして、この全長1万メートルの、塔の足元に、一人の少年はいた。少年は、塔にあることをしていた。

「んーんー！」

はるか50年以上前に、人々がしていたことだ。

「んはーんー！」

それは、閉まっている塔の扉を。

「んばーんー！」

無理やり開けよとすることだ。

少年は力いっぱい、全長300メートルの扉を、無理やりこじ開けようとしていた。

「んがーーーーー!!」

少年は、120%の力を込めた。

.....

ダメだった。

「はあはあやつぱり開かない・・・俺には魔力はあるはずなのに・・・変だなあゝ噂では、魔力があれば開けられるはずなのに。」

ふいに後ろから。

「それは、違うわ」

「!」

声をかけられた。女性の声だ。振りかえるとそこには。真面目でやさしそうな少女と、おとなしくどこか気弱そうな、二人の少女が立っていた。

(めずらしい制服だ。どこかでみたことがある・・・たしか・・・なのにパンプレットで見たような・・・そうか!魔女学の制服!といことは、このふたりはこの生徒で魔女見習い?)

真面目でやさしそうな少女は、俺の目のまで歩いてくると、そこそこ膨らみ

のある胸に手をおき、自己紹介してきた。

「樹よ、神原 樹、そしてこの子は藍原凜、樹達はここの生徒なの、あなたは誰?どうして扉を開けようとしたの?」

すこし答えるのを迷ったが、すぐに答えた。

「お・・・俺は黒羊 祭です。開けようとしていた理由は・・・」

「黒羊!」

急に、樹さんが驚いた顔をした。

「あの・・・どうしたんですか?」

樹と名乗る少女は、あきらかに少し動揺していたが。すぐに、平静を取り戻し。

「ううん・・・ごめんなさい。なんでもないわ、ちょっと知っている

苗字だったから。」

「そうですか？」

「それで？あなたはどうしてもこの扉をあけたいのかな？興味本意かな・・」

それとも力試し？もしかして不法侵入が目的かしら、ふふ」

「違います！俺は魔女になりたいんです！」

俺は堂々とキツパリ答えた、いつもどおり。

「魔女に？」

「はい！」

俺は、バカにされることを覚悟した。当然だろう？

男が魔女を指摘そうとしているのだ、それは仕方ないことだ。

傷つくが、俺はその、悔しさをバネに、余計にその夢を叶えるため努力した。

（たしかに、世間から見れば、馬鹿なことなのかもしれない・・・でも、きつと、叶えた時に誰もが、認めてくれるとそう信じている。）

現に、一人いてくれたのだから。

俺を育ててくれた、ばっちゃんは。

「嘘をつきなさい。そうしないと友達ができないわよ」
そう言った。

実際、友達はいままで一人しかできなかった。

それでも、そのたった一人の友達は、理解してくれた。認めてくれた。

俺に、きつとなれると言ってくれた。

それは、俺にとってなによりも救いになっている。

自分の夢を言葉だけでも、捻じ曲げれば、きつと傷つかずもつと友達できたかもしれない。

そうかもしれない。その通りだ。

それが正しい選択なのかもしれない。

だが、俺は曲げたくなかった。

夢だけは。

俺の信じた夢を、友達が信じてくれた夢を、ごまかしたくなかったから。

それにもし、ばっちゃんが言うように、魔女を目指すという夢を、誰に語らず秘密の夢としていたら、あのかけがいのない友人はできなかったかもしれない。それは絶対やだ。

この真面目で、やさしそうな神原樹さんは、どう思うのだろう。

後ろの藍原凜さんは、びつくりした顔をしてる、たぶんあまりいい感情をもたれていないだろう。

自分勝手な考えかもしれないけど、俺はこの学校で魔女を目指すうえで、一人くらい俺の夢を理解してくれる友人がほしかった。友人ではなくても奇異の目でみないそんな人を

「そっか祭君・・男の子がなのに魔女になりたいのかー」

「はい変ですか？」

「いいえ、変じゃないわ。がんばって！男の子とか関係ない・・夢を信じればきつとなれるわ。」

そう言っただけ彼女は、やさしくほほ笑んだ。

嬉しかった、バカな夢かもしれない。でも大切な夢を、彼女は応援してくるとまで言ってくれた。涙が目に溜まるほど、うれしかった。二人目が現れたのだ。

「ありがとうございます！」

俺は嬉しさのあまり、全力でお辞儀した。

「えっ?・・・あっ・・・はい・・・」

彼女はすこし困惑した顔で、俺からの一方的な、うれしさをその身に受けた。

一話2

そして彼女は、少し考えるような姿勢をとると、一言。

「しってるかな？」

「え？何をですか？」

「この言葉を・・・」

『この扉の先に入れる者は、魔力をもつ者だけである。この先に進めた者には、英知を与える。魔法という名の禁断の英知を。』

「それはたしか50年前の・・・」

「そうよ、50年前に、この扉を開けたあとにある見えない扉に書かれていた一文よ。」

「たしか、それから数カ月後ですよ？ここが魔女学校と呼ばれるようになったのは？」

「そう・・・初めはこの扉は、常時開きっぱなしになっていたらしいの。そして魔力を持ち、塔の中に入る者すべてに、魔法を教えていたらしいわ。」

『スっ』

つと樹さんは、俺の頬に両手に手をあて、目をつぶった。

（まさかキス！！）

すると、隣にいた藍原さんが慌てて言う。

「キスじゃないからね！樹ちゃんは、あなたに魔力があるかどうか、探っているだけだからね！勘違いしないでね！」

隣にいる藍原さんにすごい剣幕で怒られた。

ものすごい敵愾心むき出しで言われた。

（すいません、勘違いしてました。）

「感じるわ、あなたから・・・」

「えっ！」

「魔力を……」

「嘘、そんな……男の人は魔力を持つてないはず。ありえないよ」

俺はそのまま、魔力があることに、なにも疑問もなく生きていたから、男が魔力をもっているのがそんなめずらしいことだとは思わなかった。

（男が持っているのは、そんなにありえないことなのか？）
うん！これであなたにはこの塔に入れる条件を満たしていることがわかったわ

あなたには魔女になれる資格があるわ」

「でも男だよ……樹ちゃん」

男とか女とか関係ないわ。

「でも……他の人がなんていうか。」

目を伏せながら藍原さんがそう言う。

「凜、あなたは他人の目を気にしすぎよ」

「……わ……わたしは……」

やさしい口調で。

「人はね、誰かのために生きてるんじゃない、自分のために生きているの。だから、他人がどうか関係ない、自分がどうかなのよ……」

でも人は、一人では生きていけない。だから樹たちは友達なの……」

「樹ちゃん……」

強い口調で。

「でも一人で乗り越えなくちゃいけないこともある。でも一人じゃない……」

あなたがもし、その自分の殻を出たいときは、相談して……。一人で抱えないで。

悩みが違う以上、一緒に乗りこえることはできないわ……。でも乗り越える手助けくらいはできる……。だって私たち一生の友達でしょ？」

「うん・うん・うん・うん・ありがとう樹ちゃん・」
涙に顔を濡らしながら、藍原さんはうなずく。

「あなたのためなら、どんなことでもするわ。」
そう彼女を抱きかかえながら、頭を撫でてあげている。
そしてこちらを見て。

「あなたもよ、祭くん。もしなにかあったら、樹に相談して。
なんでもものるわよ、もしあなたに、魔女になる資格がないという人が
いれば、樹がその人にわからせてあげる。もちろん力すくじやな
いわよ、ふふ、言葉でね。」

うれしかった、自分のことをわかって認めてくれた。
いままでこんなに認めてくれたのは、2年前に別れた幼馴染くらい
だ。

樹さんはまごうことなき、正義の味方気質だ。

この人は、たぶん誰にでもやさしいのだろう。誰にでも味方するの
だろう。

きつと悪にさえ。

この人は、どんな悪にも、罪を憎んで人を憎まずを体現するだろう。
どんな悪だろうと許し。

助けを求められれば、時と場合によっては助ける。

正真正銘の正義の味方。

かつて、漫画やアニメであこがれた、あのヒーローを彷彿させる。

「樹さんってなんか、正義の味方みたいですね？」

樹さんは驚いて顔で

「え？正義の味方？どうしてそう思うの？」

「えっと・・・あの？なにか気を悪くしましたか？」

俺は、心配になり尋ねる。

「いや・・・あははちよつと・・・じゃなくて、かなり嬉しくて・・・」

「うれしい？」

「実はね・・・樹の夢は、正義の味方になることなの!」
「え!」

「この夢はね、人にあまり理解されないの・・・子供っぽいとか、かっこつけとかよく言われるわ。そんなことは気にしないつもりだけど、やっぱりいわれればちょっと傷つくわ・・・」

「いいの・・・そうかしれないことは、わかるわ。でも樹にはね・・・ずっとなりたくて、あこがれて人がいるの。その人みたいに、悪から人を守り!その悪さえ許し、更生させる!そんな正義の味方になるうって、子供の時からずっと決めてるの!」

だから、樹が目指す夢を、あなたに言い当てられたことが、とってもうれしいかったの・・・だって

そうでしょ?自分の夢を理解してくれる・・・共感してくれる・・・これほどうれしいことが、この世の中にあるのかしら?」

「わかりますその気持ち!」
メチャクチャ共感した。

「・・・・・・・・・・」(私のほうが、樹ちゃんのことずっと前から、ずっと深く理解してるもん。)

「樹は貫き通すわ!どんなに笑われても、傷ついても、理解されなくても・・・・・・・・この夢だけわねニコ)」

(本物だ!彼女の信念は本物だ。)
俺も、夢に関しては誰かに負ける気はないけど。

彼女の意志の強さを、まじかで見ていると圧倒される。夢という個人個人がちがう、曖昧で大切な物で争うつもりはないけど。

それでも彼女に思いに激しく感化される、心の奥底で負けたくないと思う自分もいた。

「夢のため、お互いがんばりましょう樹さん!」

「ええ祭君!」

お互い手を取り誓い合った。それはまるでアニメやドラマの理想のライバルシーンを描いた、ワンシーンにさえ思わせる。

理想のライバルそれは、たがいに感化し影響し伸ばしあう、人の繋がりで人は、強くなるものなのだ。

(これが魔女を目指すってことか・・・)

実際、ライバルという無縁な人生を送ってきた彼には、こういう関係はフィクションであり、現実のこの世界ではないものどこか思っていた。だからこそ嬉しかった、ありもしないあこがれた関係がいま築かれたのだから。

「はいはいはいはいはいはい」

いきなり、奇声をあげ藍原さんが、俺達の間を割って入った

「わたしもわたしもーめざすー！ー！」、

最初の印象では、おとなしく気弱そうな女の子、それが藍原さんへの俺の第一印象だ。

だが顔を赤くして、両手をあげながら奇声に近い声で叫ぶ。彼女を見ていると、俺の最初の印象はどうやら間違いだったようだ、訂正しないと。

「私も、樹ちゃんみたいに正義の味方になる。私ね！わたしね！樹ちゃんのためならなんでもするの！だから私のことも、頼りにしてね・樹ちゃん」

「ありがとう凜」

そして藍原さんは、弱よわしくだが、こちらをキツとにらんできた。敵愾心むき出しである。

「あはは(汗)」

(なにか、ちがう意味でのライバルと思われる感じだな～あなたには負けないぞ！そんな気合いを感じる。)

そんな藍原さんに、凜さんはやさしく。

「こらっ・・・凜・・・やきもち焼かない。」

「うっつ！？やきもちじゃないよ~~~~うっつ」

心の内を読まれて恥ずかしいのか、藍原さんは真っ赤になって涙目

になって反応した。

そんな藍原さんを今度は、諭すように凜さんは。

「一番大事な友達はあなたなのよ。」

「はうっ（かあああ）」

「ずっと側にいてくれた。だからこれからもずっと側にいてもらおうわ。誰よりもあなたを信頼してる。ずっとずっと二人でがんばろう

(ニコ)」

「うんうんうんうんうん」

藍原さんはすぐくうれしそうだ。

(この二人からは、友人以上の繋がりを感ずる。)

それは、一緒の夢を目指すという、友人同士の語りであったが。

だが藍原凜は、夢を目指すというより、好きな友達の真似をしてい
るだけにすぎないように感じる。

本当に正義の味方になりたいかも不明だ。だがそれも、一つの夢の
形であろう。

「大切な誰かの真似をしたい。」

「あこがれる誰かみたいになりたい。」

こういう過程があつてこそ、黒羊祭や神原樹の、今があつたのかも
しれない。

夢の初めは、どんな入り方でもいい、ようはそれを、最終的に自分
の夢として、確固たるモノにできるかどうかだろう。

たとえできなくても、好きな友人の真似だけだとしても、それをだ
れが非難できようか。

所詮、人は一人で生きられない。誰かを求めてします。

「繋がり」

人がそれを得ようとするのは、必然であり欲求であり、義務なのだ。
神原樹は、それはわかつているのだろう。

ただ、無二の親友を、かけがいのない友達を頬笑み、受け入れてい
た。

その友人同士の、ほほへましい繋がりを見て。黒羊祭はいまはいな

い、手紙と電話だけのやり取りの幼馴染のことを思い出した。

1話3

魔女になったら、きつとまた会いにいこう。

きつと胸を張って、あの時の約束を守れるから。

そう、彼が思い出に浸っている時。

「祭君。」

樹さんが、話かけてきた。

「!・・・はいなんでしよう。」

「残念だけど、あなたは魔女にはなれないわ。」

「ま・・・魔女になれないって・・・どういことですか?」

「ごめんさい、さっきあなたには、魔女になれる資格はあるっていただけ、なれない理由があることを、ド忘れしていたわ。」

「しかたないよ・・・樹ちゃん、男の人がいきなり魔女になりたいなんて、言ってきたんだから・・・魔女になるための、もうひとつの条件をド忘れしていても。」

「もうひとつの条件・・・そ・・・それは、一体なんなんですか?」

樹さんは、申し訳けなさそうに。

「・・・昔はね、この魔女学への入学条件は、魔力を持っていることだけだったの。」

いついかなる時期でも、この塔に入れさえすれば、いつでも入学できたわ・・・でも今は違う。

昔は常に開けばっなしになっていた、この扉も、ここの生徒しか開けられない。

そして、この魔女学で、魔法を教わることのできる者は、1年に1度・・・3月3日、この扉の開放日にこの塔に入れた者だけなのよ。残念だけど今日は、5月10日。ここに入学して、魔女見習いになりたいのなら、来年の3月3日まで、まで待つ必要があるわ。

それから魔女を目指しても遅くないんじゃないかな?」

「・・・でも俺は・・・いますぐ魔女になりたいんです!」

「・・・・・・・・気持ちはわかるけど・・・・・・・・」

「やっと・・・・・・・・沖縄から、旅費をためて東京にきたんです！」

ここで魔女をあきらめたら、またいつここに来れるかわかりませんが、だからオレは、今日いますぐ、この魔女学に入学できるよう、この学園長に直談判してきます。」

「・・・・・・・・」

樹さんは感心したように。

「すごいわね・・勇気があるわ、さすがだわ祭君。」

「そ・・そうですか・・」

すこし照れくさい。

「ええ・・あの学園長に直談判だなんて・・」

「あの学園長・・」

「超有名だから知らない訳じゃないでしょ？噂では学園長は、何千年も生きている不老不死らしいの」
え？

「この魔女学は、50年以上前まで大東京タワーといわれる場所だったわ。開かず壊せず、ただ存在するだけの塔だった。その頃からこの中にいたという噂よ学園長。」

「!?!?」

「魔女学校学園長メフェス ヴアンパイア・・」

彼女は、50年前からここで魔法を教えている。

いまでは先生職は卒業生の生徒にまかせいるけど、それからいままですつとこの塔で、学園長として容姿は一切変わらず存在し続けている。

みんながこぞつて噂したわ、学園長は不死ではないかと、この扉が開く前から、この塔の中にいたんじゃないか？

実はこの塔に封印されている化け物で、人間を墮落させるため、魔法という禁断の果実をもってきた悪魔じゃないかって、いろいろね」
「・・・・・・・・(ぶるっ)」

「この塔は、人が存在する前からあった、もしかしたらここを作っ

たのも彼女で、ずっとこの塔の中に生き続けているのかもしれない。
・授業は先生だけだし、樹はまだちゃんと一度も見たことはないから、確信はないけど……」

「……」

「い……樹ちゃん！」

「！」

「……大丈夫？祭君？」

「へ？」

「……顔が青いわよ……？」

樹さんは、心配そうに、顔を覗き込むように見つめてきた。

「もしかしていまの話……全然しらなかった？」

俺は慌てて。

「ち……違います！知ってました。これは侍者青いです！」

(武者青いつて何！それをいうなら武者ぶるいだ！)

「……ごめんなさい知らなかったみたいね。(しょぼーん)」

演技は、バレバレだったらしい。恥ずかしい。

「樹のせいで……怖がらせちゃったみたいね(しょぼーん)」

樹さんは、本当に申し訳なさそうだ。

「い……いえ……へっちゃらです。これから歴史上初の、男が魔女を指すんですから。」

倒してみせますよ、学園長を！」

「えええ！？」

「ま……祭君！祭君！倒しちゃダメよ！ダメよ！学園長なんだから

！(汗)」

「あつ……そ……そうでした……すみません」

情けないことに、かなり動揺してしまっているらしい。

(不老不死……化け物……そんな相手に直談判……)

でも……知らないより知っていたほうがいいはず。交渉する上で、相手のことを知らないより、知っていたほうが、断然有利にことを運べるだろう。()

なら、相手が相手だけに、それだけの気概と気合いが必要だろう。
俺はあらためて、自分に渴をいれる。

『渴!』

その心境とは裏腹に、顔はまだ青かった。

「祭君……」

「!」

彼女は俺に近づき、震える俺の手をとった。

「樹さん?」

「!……樹ちゃん……まさか!?」

そして俺の手のひらに、指で人の字を書くと、それを。

『へ。』

「!?!?!?!?」

(舐めたああああ!?!?)

「お母さんがね……よくやってくれたの樹に、こうやって手のひらに人を書いて舐めると、緊張がほぐれるって」

(樹ちゃん!それは自分で舐めるものだから!わたしもやられて、嬉しかったけど!)

俺は。

(女の子に初めて、手のひらを舐めれた……)

あまりの衝撃に、さきほどの恐怖はすべて吹き飛んでいた。

「いいいいいいいつ……樹ちゃん!汚いよ!舐めたら!」

「あっそうね!ご……ごめんなさい!祭君……いきなり手を舐めてしまつて、汚かつたでしょ?」

「そ……そうじゃないよ」

藍原さんは、慌てて急いで、樹に自分のハンカチを差し出した。

「ありがとう凜」

それを。

「はい、コレを使って祭君」

俺に渡した。

「！そつちじゃないよ！樹ちゃん！」

「え？」

「あ・・・あの、いいですから・・・気にしてませんから」

「そう・・・ごめなさい。あなたが・・・死んだ母に似ていたから、
ついでね」

（容姿だろうか？それとも雰囲気？）

「いえ・・・俺、勇気出ました。頑張ります」

今度は、心の底からそう言えた。

「よかった」

「樹ちゃん！」

「ん？何？」

「そろそろ時間だよ・・・授業遅刻しちゃう」

「あ・・・そうね・・・もうこんな時間！」

樹さんは、時間を携帯で確認した。

「ごめんさい祭君、こんな所で長々と立ち話して」

「いえ」

「じゃあ樹達はいくわね、扉は開けておくから、がんばってね」

「はい！」

そう言うと樹さんは、閉じた扉の前にいくと、スッと手を、やさしく触れた。

すると、300メートルはある、開かずの扉は、音もなく容易に開いた。

その静けさに、まるでいままでずっと開いていたかのような、雰囲気さえ感じた。

「樹さん？あの・・・扉はどうすれば閉まるんですか？」

「ん・・・2、3分もすれば勝手に閉まるわ」

「そうですか。ありがとうございます。」

「また会いましょう祭君・・・教室で」

「はい樹さん」

樹さんも、このことは言っていなかった。たぶん知らなかったんだろ
う。知っていたらきつと、彼女の性格なら、絶対教えていたはず！
「くそっ！こんな所で引けるか！」

（今日ここに入るって決めたんだ・・・あきらめるか！逃げてたま
るか！こんな所で、後ろを振り返る余裕なんて、いまの俺にはない
！前につき進め！歩みを止めるな！このまま学園長室まで突っむ！
！）

彼は、ゴーレムに群れに追われながら、塔の中に男子初の侵入をと
げた。

1話4

「はあはあはあ・・・」

(反則だあ)。この塔ゴレムだけじゃなく、あんな撃退システムがあるなんて・・・よく生きてらたなあ・・・俺。)

深さがわからない落とし穴。

それに超高速で飛んでくる鎌。

部屋に逃げ込んだら、閉じ込められ水攻め。

そのたもろもろ、トラップの数々。

何回・・・死んでたかわからない。

「くっ」

(これは試練なんだ、男が魔女のなるという、普通ならありえない偉業を達成するまえの・・・これくらい乗り越えてみせろという神の提示！)

そうぜーぜー言いながら、前向きに考えることくらいしか、今の俺にはできない。

「ぜーぜー」

それはそうだろう、全長一万メートルの塔の中で、10時間もさまよっているのだから。

祭がふらふらとさまよい歩いていると、ふと壁に。

『この先100メートル先に学園長室』

というパネルが壁に貼ってある。

(よっしゃああああ！！学園長室までもうすぐだ！！！)

祭は涙に顔濡らし、意気揚々にスキップしながらこの先の学園長室を目指した。

(ついにここまで・・・約10時間さまよって、あと100メートル先の場所にまできた・・・全長一万メートルのこの塔で、よくこ

こまでたどり着いたものだ・・・)

彼は自分に感動していた。

(そうだ・・・俺は、こんなところで、迷っているわけにはいかな
んだ！)

脳裏に10年前の、あの日のことを思い出す。

(あの日、あの時みつけた、自分の道を進むためにも・・・)
大きな白い翼、温かい手、彼女に助けられた時から、彼は魔女にな
ると心に決めて願った。

(願ったなら止まるな、行動しろ。

願うだけならだれでもできる。

叶えるのは、願いじゃない！叶えようとする信念と行動力だ！

前を見る、後ろを振り返るな！ただ全力で、自分で決めた道を前に
進め！)

そのとき。

『よきーん』

目の前の床から、これまでより遙かにおおきいゴーレムが出現した。

「なあ！！？」

(不意を突かれた！？)

ゴーレムはその巨大な拳を振り上げ、それを祭り向けて、超音速で
振り落とした。

「！？・・・避けられない！」

(なら、受け止めるしかない！受け止められるか？否。受け止め
て見せる！！)

そう祭が決意した時。

「！？？」

『ザッシュッ』

ゴーレムの体が真つ二つになり、そのまま砂となって消えた。

「な・・・なにが・・・」

(どうなつている?)

なにがなんだかわからない。なにもしてなのに助かった。

(これは・・・一体どうして?)

そのとき。

「そこでなにをしている? 貴様は・・・」

「!」

ボソツと言う感じの声だが、その声冷たさに、一瞬ビクつとして、体が硬直した。

俺はその冷たい声の、持ち主を見た。

そこには、この学校の制服を着た、黒髪の少女がいた。

凛々しくかつこいっい雰囲気的女性だ。

「あ・・・えーと」

(どうしよう?なんていい訳しよう?俺はいま、侵入者なわけで、もしかして俺つて?悪人なんじゃ?)

返答しだいでは、戦闘になるかもしれない。祭は慎重に答えを模索した。

(ここは絶対、穏便に済ませたい。)

決して、不純な動機で、ここにいるわけでないのだから。

(魔女になりたいからここに侵入したといえ、きつとわかってくれる・・・)

「はっ!」

俺はそのとき、田舎の村での、ある出来事を思い出した。

それは村のみんなに。

「俺は魔女になる」

そう夢を語った時だった。

それを聞いた一人の少年が。

「魔女学つて女しかいねエーんだろ?エロ目的で入るのか?」

もうだめだ土下座しかない！そう思った時。

黒髪の少女は、俺の目のまえに来て、口を開いた。

「おまえは……」

『ぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐん』

「！」

「！」

絶妙なタイミングでファンファーレがなり響いた。

それは鮮やかに美しく。

別にその場に、人工の楽器があつたわけではない。

人体の楽器、お腹の音だ。

もちろん俺じゃない、彼女のだ。

「あ……あの……（カアアアアアアアア）」

この瞬間、俺達の立場はなにもかも逆転したように感じられた。

彼女はものすごい顔真っ赤にしながら。

「あ……100円貸してくれないか？たのむ……」

（なぜ100円!?!）

なぜかこの状況で、100円を要求された。

黒髪の彼女は、顔を真っ赤にしながら、目を会わせず、申し訳なさそうに目を伏せていた。

それは、お腹の音を聞かれた恥ずかしさなのか。

それとも100円を貸してくれたと、頼んだ恥ずかしさなのか。

はたまた。複合的恥ずかしさなのか。

（……謎だ？）

俺は一番の謎を聞いてみた。

「百円をなにに使うつもりですか？」

理由はなんとなくわかったが、つい聞いてしまった。

「そ……それは……アン」

「アン？」

ぐうぐうぐうぐうぐうぐう

2度目のファンファーレが鳴り響いた。

なにも言わず俺は、そっとガマ口の財布から、200円を取りだし彼女に手渡した。

「ありがとう・・・恩にきる」

彼女は顔を真っ赤にしてすこし潤んだ瞳で、上目使いでそういった。さつきまで凛々しくかつこいい彼女のイメージはどこにもない。いま俺の目の前にいるのは凛々しくかつこいいがお腹を空かせたかわいいうな子だ。

(あんま変わってないや・・・)

いや実際ギャップはめっちゃめっちゃありますけどね。

「いえ大したことしてませんよ・・・じゃあ」

俺はそういうと、彼女と分かれて、100メートル先の学園長室を目指すそうとした。

だが、ふと思いたち、別れ際の彼女に俺は。

「あの」

「なんだ？」

彼女はもう平静を取りもどした。

前のかっこいい凛々しいイメージに戻っていた。

(なんとという回復力！もしかして魔法？)

俺は聞いた。

「さっきのゴーレムを倒してくれたのは、あなたですか？」

「ちがう・・・私は人助けするような、善人じゃない」

「そ・・・そうですか」

(・・・)

祭は少し考えたあと、何を思ったのか。

「あの・・・男がこの魔女学について、変に思いませんか？」

「興味ない」、

「俺はここで、魔女を、目指すそうと思っているんです。変じゃないですか?」

「興味ない」

「……そうですか」

さきほどの、顔真つ赤にしていた彼女は、もうそこにはいない。

ドライな顔でそう言い放った。

ぐうぐうぐうぐう

また鳴った。

ホットになった

「……もうコンビニに行く」

「は……はい……引きとめてごめんなさい……なにを食べるんですか?」

「アンパン」

「そ……そうですか」

真つ赤な顔でアンパンと答え、こんどこそ彼女は去って行った。

(なんかかわいい人だ……)

それが名前も知らない、彼女への俺の第2印象だ。

(でも、男が魔女を指すといつても、全然気にしない人もいるんだな、それにいちおう、侵入者なのに、そつちも気にしてないみたいだし……)

「まあ世の中、差別する人ばかりじゃないってことかも」

(むしろそう思っている俺こそが、差別しているのかもしれない。)

「反省しないと……」

(でも……)

後ろを振り返り、もういない彼女を思い出した。

「ほんと……ホットでドライな人だったな……」

1話5

カツカツカツ

一万メートルの塔の廊下で足音が鳴り響く。

それは、石畳みの廊下を、早歩きしてコンビニを目指す、黒髪の少女の足音だった。

黒髪の少女はお腹が減っているなか、反省をしていた。

(くっ・・・まだ未完成だなあの魔法は、あの程度のゴーレムを破壊するのに、かなりの魔力を食ってしまった。もうすこし魔力の燃費をよくしないと)

『ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ』

「・・・・・・・・」

(こっちの燃費もな・・・)

ぐぐぐぐぐ)・・・よすぎるぞ・・・補給しないとなアンパンで・・・

だが彼女は知らなかった、コンビニでいま、アンパンが急激に売れ切れていることを。

彼女がアンパンを購入できたのは、ここから10キロ先の55件目でのことだった

『それ以外を食べれるよ』
やだ。

そして黒羊祭は、黒髪の少女とは対象的に、廊下を忍び足で歩いていた。

100メートル先の、学園長室を目指して。

(今度はゆっくり・・・不意を突かれても避けられるように、慎重に・・・)
今度、いつまたゴーレムが襲ってきてても、避けられるように、祭は最新の注意を払っていた。

だが、なにも妨害もなく、学園長室前の扉にたどり着いた。

「ふう・・・着いた・・・」

たった100メートルが、アメリカ横断に匹敵する疲労を感じた。一度したことがあるが、あるときより、命が賭かっている分、この100メートルのほうが、達成感があった。

(・・・もう、ゴーレムも襲ってくる気配はないけど・・・もしかして、侵入者迎撃システムの魔法効果が切れたのかな?)

「・・・」

(やっぱり、あのゴーレムで最後なのかもしれない。ボスっぽかつたし・・・自動発動型のトラップで、時間がくれば解除されるのかも・・・)
そして祭は

スッ

目を閉じ。

「ふうー」

つとー呼吸した。

そして、目のまえの、念願の学園長室の扉を見た。

(ここが学園長室・・・)

扉の札に、そう書いてあるのだしそうなのだろう。

「ここに学園長が・・・」

(よく知らないし見たこともないけど。)

「不死の化け物か・・・」

「ゴクリ……………」

祭は息を飲んだ。
そして。

『ばんばんばん』

あらためて、3倍の気合いをいれた。

「よっし……………いくぞ……………つっ」

(痛い……………)

さすがにいれすぎた……………つっ)

がちやり

祭は、その未知の存在である、学園長がいる部屋のドアノブに、手をかけ。

その重厚な扉を開けた。

『きゅきゅ』

心の中で。

(うりゃーっ!ー!)

といいながら、ゆっくり開けた。

開けたそこには、広い空間とその真ん中に、1人の女の子がいた。

きっと風呂上がりだったのだろう、タオル一丁で。

そのタオルで、頭を拭きながら。

「！」

女の子と目が合う。

すぐに目を反らした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その場に、重い沈黙が流れた。

その緊張の糸を、断絶するように女の子は。

「何者じゃお主？学園長である、わらわになんの用じゃ？」

かわいい透き通った声でお婆言葉で、とんでもないことを言った。

「学園長！！？」

（こんな子供が、タオル一丁の子供が・・・学園長！？）

なんと、目の前にいるちいさい女の子が、学園長だという。

彼の予想では、見た目おばあさんくらいを予想していた。

だが、予想は大きくかけ離れ、その容姿は子供だった。

だが納得はいった。

（・・・50年以上、この容姿なら・・・誰もが不死であろうと思うだろう・・・）

祭は困惑したが、ほっと胸をなでおろした。

（どんな怖い人かと思ったけど、なんともないこんなかわいい子供とは、心配して損した。）

祭が一瞬、気が抜いたその瞬間。

学園長は、タオルを濡れた頭に巻き、目にもとまらぬ速さで、祭の首を掴まみ、そのまま床に押し倒した。青向けに

（ぐうつうつつくるしい！！？）

幼児体型の学園長は、祭の胸にお尻をずっしり馬乗りして。両手で

祭の腕を抑え、床に固定した。

（なんて力だ！人間を遙かに超えている・・・こんな子供が・・・）

祭は動きは一切封じられ、床に固定され身動き一つできなくなった。

「聞いておろう？わらわが・・・お主は何者じゃと？何の用でここを訪ねたかと？・・・それと男の分際でなぜこの塔に入れた？・・・理由をまずのべよ」

「由をまずのべよ」

学園長の威圧と、そのアレの、アッアレのせいで俺は、まともにも見れなかった。

「早く答えよポーズ」

『ゴゴゴゴゴゴ』

学園長は、さらに圧迫感を強めた。

きつと漫画なら、ゴゴゴゴゴゴという擬音が、学園長の後ろに書かれていただろう。

(きつと・・・答えを間違えれば・・・死ぬ！)

「お主・・・魔力をもっているな！・・・なぜ男が魔力を持っている、まずそれから答えよ」

『・・・それは俺にはわからない』

そう答えようと思ったが、俺は思いとどまった。

(この状況でそんな曖昧な答えを、この学園長は許すのか？)
言えばどうなるものかわかったものじゃない。

(答えるなら、第一声は・・・この子が・・・学園長が・・・満足できる答えじゃないと・・・)

祭は最良の答えを模索した。

だが、小さい子供に、小さいお尻で、小さい両手で、床に押し付けられている異様な状況で。

祭は、思考回路をうまく機能できなかった。

それと、子供とは思えない鋭く赤い眼光に、射ぬかれたせいもあるだろう。

まるで獅子に捕らわれたウサギだ。

体格はまったく逆のはずだが、すべての優位は相手にあった。

「3秒以内に答えよ・・・答えぬ場合・・・」

「！」

あーん。

「噛み殺すー！」

学園長は、喉元に開いた歯を押し付けた。
ゾクとなった。

それはまるで、自分が捕食者に捕らわれた、あわれな子羊のように感じた。

あの強大なゴーレムより遙かうえの。

『死の予兆。』

圧倒的。絶対者からの。

『死の宣告。』

死。

死。

死。

死死死死死死死死死死。

それ以外の言葉は、祭の脳裏に、一切浮かばなかった。

「1。」

死のカウントが始まった。カ

「お・・・」

「2。」

「俺は・・・」

「3・・・」

「魔女になりたいんです!!」

「!」

祭は、声を振り絞り。思いのたけを吐き出した。

最良の答えなど外吹く風。ただ一つの大切な夢をぶちまけた。
3秒がすぎた。

そして学園長は、俺の胸で、ひとしきり笑うと、ニヤツと口を歪ませた。

「男のくせに魔女になりたいくて、しかも魔力までもっておるとは・・・面白い逸材じゃのう？お主・・・」
その雰囲気にもまれ声すらだせない。

「よし・・・」

学園長の顔が、俺に近づてくる。

（死ぬ！）

そう思った時。

耳元で。

「お前を、魔女にしてやるう。」

「え？」

以外な答えが返ってきた。

「本当ですか？」

「ああ・・・いいぞ・・・だが『条件付きでな。』」

それはまるで悪魔との契約にも感じた。

だが魔女になれるなら、それでもいいと俺は思ってしまった。

1話6

学園長は、頭にタオルを巻き体を持ち上げ、俺の上で仁王立ちになった。

そしてさらに、邪悪笑みを浮かべ。

「さあ・・・入学手続きを始めようか・・・」

こうして悪魔との、いや、学園長との契約が執り行われようとしていた。

「めふいすー」

そのとき天上から、陽気な声が響いた。

「なんじゃフェリス？」

「!？」

天上には、体育座りをしている女性がいた。とがった耳と大きな胸が印象的な女性だ。

普通とは違うのは、背には蝙蝠のような羽根と、お尻には悪魔のしっぽのようなものが生えていたことだ。

(露出の多い服だな・・・)

まるで、小悪魔を連想させるそんな風貌だ。

(そういえば、さつきからまともに、前も見れないなー俺・・・)

「オトコがまりよくもってるのって、めずらしいのー？」

その質問からすると、ずっと天井で体育座りして、俺達の会話を聞いていたのだろう。

(いったい何者なんだ?)

学園長と違って見た目は怪しい感じだが、その存在感は真逆。

害意の一欠けらも感じない、赤ん坊のような、そんな印象を受ける女性だ。

(まるで親子のようだ・・・大きさは逆だけど・・・)

「んー・・・まあ・・・めずらしいのう、男が魔力をもっておるのは、

生物理論上ありえんしな」

「でもいるしーここに！」

フェリスさんは、天上から足のつま先で俺を指してきた。

「そうじゃなーい……もしかしたら、理論外で産まれた存在なのかもしれない」

「！」

(理論外？どういう意味だ？)

「じゃあどれくらいめずらしいのー？」

「ネツシと同じくらいかのう」

「でもネツシは、とうの300カイくらいで、たくさん飼っているよなー？」

「！？」

「そうじゃったのう……じゃあイエティーくらい？」

「にははは、それもたくさんいるしー」

(嘘おおおお！？いるの？あの伝説上の生き物たち！？)

「じゃあこいつも飼うか？」

「かうーい。にははは」

そういつて学園長は、服を着ながら俺をぎよろつと見てきた。

『ゾクッ』

「冗談じゃよククッ」

まったく冗談に聞こえない。

「……あの……学園長……この人は？」

「こいつか？こいつはわらわの使い魔、悪魔のフェリスじゃ」

「よろぴくーにははは」

「悪魔！？悪魔って実在しているんですか？」

「そりゃ失礼じゃろう本人を目の前に……それに魔界にいけばうじやうじやいるぞ」

「魔界！？魔界ってあるんですか？」

「そんなの常識じゃろ。」

(どこの常識ですか！)

「まあこやつは、わらわのペットみたいな奴じゃ、気にするな」

「・・・ペットですか・・・」

「にははは、ペットです。わんにゃん」

「なんならこやつに、首輪をつけて散歩してみるか？」

「しません！」

「じゃあお前につけて、散歩してやろう」

「されません！」

(めちやくちゃだ！この人・・・)

「にはははははは」

俺達のやりとりを聞いて、悪魔のフェリスさんは爆笑している。

(でもなんだろう・・・この二人からは、なにか主従こえた信頼関係を感じる。絆を超えたなにか・・・気のせいだろうか？)

「で？ボーヤ」

「へ？・・・は・・・はい」

「まだなにかわらわに質問はあるか？」

「質問？・・・ですか・・・」

「今日とはびつきりに機嫌がいい・・・なんでも聞いてやるぞ」

「・・・」

俺は目を反らしながら聞いた。

「1ついいですか？」

「なんじゃ？」

「服を着てください」

「着ているじゃろ？」

「下もです」

「靴下か？履いておるぞ」

「・・・真ん中です・・・」

「マンなか？ふふ・・・エロいのうボーヤ」

「・・・」

もう言葉もない。

こうして俺の魔女への扉がいまが開かれた。
閉まった感じもするけど気のせいであってほしい。

「ふむふむふむ・・・」

俺は学園長に聞かれ、なぜ俺が魔女になろうとしたのかの、経緯を説明した。

もちろん聞かれたからには、正直に誠実に、あの日のことを正確に語った。

だがすこし脚色はあったかもしれない。

たぶん、興奮していたせいだろう。

命を救ってくれた、あこがれの人のことを語るのだ、仕方ない。

「つまらん」

「はい？」

俺の夢はさも当然のごとく、学園長に一蹴された。

「ちよーつまらん。」

こんな反応は初めてされた。

「ゴミじゃな。そんな夢の理由・・・」

ムカッ

「なっなんですか！学園長！理由をおしえてください！」

大切な夢を、あこがれのあの人を、バカにされた気分になり。

ソファーに深く座った、学園長に詰め寄り、つい声をあげてしまった。

夢を、けなされるのはいいが、夢を目指す理由だけは、許せなかった。

「あっ！」

キッと学園長に睨まれた。

(しまった！？)

天井から。

「まつりちゃん、コドモあいてに、おとなげないぞー」

フェリスさんからお叱りをうける。

「す・すいません」

(つて・・・子供じゃないし！)

「子供じゃないのじゃ！フェリス！」

「にははめんごー」

(もしかして俺を、フォローしてくれた？)

「・・・まったく、魔女を目指す理由がそんなありふれたものす」

くどうでもいい理由とは

「・・・」

「スーパーつまらん・・・ハイパーつまらん・・・ミラクルつまらん」

「そこまでいわなくても・・・」

「もつとまつとうな理由があるう・・・」

「どんなですか？」

「世界を征服したとか、入学してエロゲーの鬼畜主人公バりに女の

子達を攻

略したいとかのう」

「全然まつとうじゃないです！つて・・・エロゲーつてなんですか鬼畜つてなんですか！？」

「なんじゃそんなことも知らないのか？純情田舎少年め！」
「すいません田舎者で。」

「なんならわらわが体で、教えてやろうか？」

学園長は俺を視て、いやらしく舌なめずりした。

『ぶるっ』

「え・・・遠慮しておきます・・・」

きつと死ぬほど辛ことをされるだろう。

鬼畜その単語があやしい。

「なんじゃ・・・本当につまらん奴じゃのう・・・やはり貴様は、エロゲーの主人公にはなれそうにないのう・・・」

(だからわかりません！)

「まあいい。なりたくなつたらわらわにゆえ。すぐにこの学校の色んなキャラの攻略法をおしえてやるぞ」

何を言ってるんだこの人？

「こつみえてわらわは、エロゲーの達人といわれておるからのう」

「?・・・だれにですか？」

「あたし・・・にだけ」

一人か！

悪魔のフェリスさんは、空を飛びながら。

「すごいんだよ、めふいすーまいにちーねつとしょっぶのアマゾンってかわにれんらくしてーかいまくってるのー」

「すごいじゃろう」

なにが？

えへんって感じで、学園長はない胸を張り腰に手をおく。

「そ・・・そうなんですか・・・」

(さ・・・さっぱりわからない・・・こ・・・これが都会というものが。)

「それにのうわらわはのう、エロゲーだけはではないぞ」

「?」

「わらわに攻略できない、テレビゲームもないのじゃ」

「はあ・・・そうですか」

(テレビゲームか・・・)

「俺もファミコンとか、ゲームボーイとかもってますけど・・・」

「!?!?・・・ぶはーッ・・・お主、何者じゃ！いまどきその名を口にするとはお主、通っわもじゃのう!」

「はあ・・・」

都会の言葉が、わからない。

ふと祭は、学園長室にあるテレビのデッキを見た。

その中には、たくさんのファミコン、ゲームボーイらしきゲーム機がごちゃごちゃ入ってる。

「………学園長って、ゲームとかも、やるんですね？」

「あたりまじやるう、こんな所にずっと閉じ込められておるのじやからのう、暇で暇でしょうがないのじや」

「閉じ込められてる？」

「おっとここからは、トップシークレットじや」

「はあ……」

（早く入学手続きしないかな……）

「まったくいい世の中なったものじや、昔はこの塔の、何百万冊もある……つまらん魔法書呼んで、時間を暇をつぶすしかなかったんじやが、いまじゃゲーム万歳ーじゃ！ゲーム最高ー！じゃあ」
にぱにぱ笑っている。

（やばいかわいい。撫でてあげたい。たぶん死ぬだらけど……）
初めて、学園長の子供らしい笑顔を、見た気がする。

「……あの学園長はここから出れないんですか？」

「ん？まあ……のう……出られるんじやが……本体はでられんのじや」

「本体？」

「まあいい……わらわの話は……」

（気になる……）

「で？お主の夢は、ここに入学して女の子達を攻略する……じゃったな？まず誰からいくわらわのお勧めは……」

「勝手にそれを、夢にしないでください！さっきも言いましたけど俺の夢は魔女になることなんです！」

「魔女になって、女の子を攻略？」

「攻略から離れてください！どれだけ攻略させたいんですか！」

「しないのかつまらん。」

しよぼーんという感じになってる

かわいいーいちいち、妹にしたい。
ずっとこんな感じなら。

「おっ！そういえば今日は、5月10日じゃな・・・！まさかわざわざおまえが今日、ここにきたのは、ここに入学するためか？」

「はいそうですけど、でも驚きました。うちの田舎のパンフレットに、5月10日に行けば魔女になるって書いてあったのに。まさか実は3月3日で2カ月も印刷ミスがあったなんて・・・」

「アホウ！それは20年前の情報じゃ」

「ええ！！？そうだったんですか？どうりできょう！！」

「どれだけ田舎なんじゃ！お前の故郷は・・・」

「たしかに・・・すこし田舎かも、都会から来た人は、チャンネルが2チャンネルしかないのを驚いていたし・・・」

「ぶうウウっ！」

レベル高い田舎じゃのうー！！

じゃあ・・・チャンプの発売日は？」

「え？水曜ですけど」

「ぶうウウっ！」

こっちでは土曜くらいにはでるぞ

「ええええ早い！？」

「遅いのじゃおまえの所が！」

「でも火曜発売って後ろに書いてありますよね？」

「1日ずれてるぞ、お主・・・」

(ただ者じゃない田舎者じゃのう・・・こやつ。)

「あの・・・そんなことより、学園長・・・魔女にしてくる条件ってなんですか？それを満たせば、俺を魔女にしてくれるんですよね？」

「うむ・・・ここに入学させてやる。そして卒業できればなれるぞ。」

(やったー！)

「それで・・・条件とは」

『ニヤッ』

学園長の口元が、いやらしく歪む。

「なに・・・かんたんな条件じゃ、それは・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4265ba/>

魔女と僕と魔女

2012年1月13日01時45分発行